



Title	弔辞
Author(s)	松山, 亮次郎
Citation	明治大学教養論集, 223: x-xii
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/8893">http://hdl.handle.net/10291/8893</a>
Rights	
Issue Date	1989-03-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

## 弔 辞

十九日朝、大島先生より電話があり、八角さんが亡くなられたとのこと、一瞬わが耳を疑ったのですが、まぎれもない事実と知り啞然とした次第です。貴君とお逢いしたのは茶飯のことなのでそれと定かではありませんが、さして以前のことではありません。しかるに今貴君の姿は祭壇場にありますが、貴君がもうこの世の人ではないのだと実感せざるを得ません。それでも一方では頬のやゝこけた貴君の温顔が現前し、抑揚が聞こえてきます。

貴君の現身の姿とともに彷彿されるのが、鬼籍に入られ既に星霜を閲された丸野弥高先生の温容です。悠揚迫らずかつ行き届かれた先生と指導・師事の関係にあつたお二人の姿は傍目にも羨ましく思われしました。また貴君は先輩同僚にも恵まれ、ことに先輩との二人三脚にも似た常日頃の姿は微笑ましくすらありました。明治大学商学部、そして和泉校舎という貴君にとってこよなき環境のもとで教育・研究に尽瘁されました。このことは貴君にとって最善の人生を歩まれたことだと思われず。しかし好事魔多し、世俗の言葉ではありませんが、やはり人生の断面を穿つものではないでしょうか。貴君は卒然病に仆れ、たちまち白玉楼中の人となつてしまわれました。いたましい限りというよりいす

べを持ちません。

往日、茨城県の村松療養所で病を医されつゝあつた貴君を阿部喜三男、宮島夏樹両先生と同道お尋ねしたことがあります。春のこととて太田に光圀の西山莊を尋ね、村松の虚空像菩薩に詣で、そして貴君を訪ねました。これはもはや御見舞というよりは行樂の一環といふべきであり、貴君はおのずからそれに和する暢やかな心の持主でありました。その宮島、阿部先生が、相次いで物故されたことは今では旧聞に属することですが、爾来いかなる次第か、国語の教員には中道にして鬼籍に入る者を少なしとしません。しかしまさか未だ春秋に富まれる貴君までが点鬼簿の一員にならうとは。

私が貴君の御前で永訣の言葉を告げようとは思いませんでした。今は貴君の魂の平安を祈るとともに、貴方の母校であり、貴君がすぐれた足跡をしるされた明治大学の行く手を見まもつて頂くことを切念するばかりです。

後になりましたが、匆卒の間にわが子、わが夫、わが父に帰らぬ旅路に先立たれた御遺族のお嘆きは察するに余りあります。時の流れは人の世の悲しみを医すことがあるとはいわれますが、残された方々には尽きることない悲しみと思われれます。しかし悲しみを越えて日一日と新たな日々を歩まれることも、在天の靈に答えることではないでしょうか。そのためにもどうぞ健康に御留意ください。

これをもつて友人一同に代つてお別れの言葉とさせて頂きます。

では八角さんさようなら

昭和六十三年三月二十二日

友人代表・政治経済学部教授

松山亮次郎